

畜産会 経営情報

主な記事

- ① セミナー経営技術
遊休桑園が和牛の放牧地に変身！
- ② 経営自慢
目標を持って二人三脚、安定経営を築く
- ③ 牛肉・豚肉、子牛市況

中央畜産会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1丁目26番5号
虎ノ門17森ビル(15階)
TEL.03-3581-6685 FAX.03-5511-8205
URL <http://jlia.lin.go.jp/>
E-mail: jlia@jlia.jp

迎春

2005



謹んで新年の
お慶びを申し上げます

平成十七年 一月

中央畜産会

セミナー

生産技術

遊休桑園が和牛の放牧地に変身！

—— 放牧場産子の特性も解明 ——

富 永 哲

はじめに

写真－1、2（福島県安達郡白沢村 大内武幸氏ほ場）は、遊休桑園を抜根せずに、牛の力を借りて放牧地に変身させた様子です。

かつて盛んだった養蚕業の衰退で桑園も放

置されるようになり、こうした遊休桑園は福島県内に約3000haあるといわれています。傾斜がきつい遊休桑園を畑にすることは難しいため、牛を放して放牧地として利用しましょう。放牧は全国的にも見直されつつあり、牛の健康に良く、年間の飼養管理費と労働力は通年舎飼いの半分になるため肉用牛経営に大きくプラスになります。桑園を放牧地としてよみがえらせれば、遊休農地の解消、和牛繁殖経営の改善になります。農家の協力を得て、放牧地の造成、放牧、子牛の育成、肥育、すべてを農家現場で実証しました。その結果を紹介します。



写真－1 造成前の遊休桑園



写真－2 放牧地化した遊休桑園

遊休桑園を放牧地化する
大まかな流れ

遊休桑園を放牧化する大まかな流れは、表－1に示した通りで、(1) 桑樹刈り払い、(2) 牧柵設置・管理放牧、(3) 除草剤散布・簡易耕起等、(4) 牧草播種、(5) 放牧開始の5つの作業工程を経て放牧地になります。

(1) 桑樹刈り払い



写真-3 桑樹の切り倒しは冬場に作業を行うと効率的

桑の葉が伸びる春から夏に、桑の枝を刈り払い、運び出しの作業を行うのは大変な重労働です。そこで、冬場の葉のない時期に作業を行います。切り倒した桑樹についた葉を牛に食べさせることも1つの方法ですが、作業効率・造成期間を考え選択してください（写真-3、4）。

時 期：12月～3月

刈り取り高：地上0～30cm程度（不拔根）

使用機械：小型チェーンソー、排気量25cc程度の刈り払い機、ノコギリ

- ・人数が確保できれば一度に作業してしまいたいですが、少人数ならば時間をかけて少しずつ作業を進めてください。

(2) 管理放牧



写真-4 枝切チェーンソーがあると、切り倒した木の枝をさらに切断でき、運搬が楽になる

雑草の除去・抑制と蹄耕法による耕起（牛が歩くことで地表面を攪拌する）をねらって、放牧を行います。

時期：5月上旬～8月下旬（約120日間）

牧柵：電気牧柵を桑園の外周に2段張りします（子牛がいる場合3段張り）。

- ・桑樹の立木を利用する場合、桑樹に直接^{がいし}碇子を付ける、パイプハウス鉄管による簡易牧柵支柱の使用等で経費を抑えることができます（図-1、写真-5～11）。
- ・牧柵の下草は刈り取ります。

(3) 放牧について

① 初めて放牧を行う時の注意

- ・牛を運動場で外気と草に慣らしします。
- ・できれば4歳以上の落ち着いた牛が望ま

表-1 放牧地化の流れ

		1～3月	4月下旬～8月上旬	8月下旬～9月上旬	9月中旬
作業工程	1年目	・桑樹刈り払い（落葉期間中）	・牧柵設置 ・管理放牧（約120日間、雑草除去、地表攪拌）	・除草剤散布 / 簡易耕起等（播種床づくり）	・牧草播種
	2年目	・放牧利用開始 → (4月下旬～12月上旬)			



写真-5 簡易牧柵支柱A
(パイプハウス鉄管+塩ビ管)



写真-6 簡易牧柵支柱B
(鉄管+角材+碇子)



写真-7 桑樹を利用する場合
(碇子を直接桑樹に差し込む)



写真-8 牧柵支柱を地面に打ち込むとき、片側を溶接で塞いだ5kg程度の鉄管 (写真-9)を使うと作業が大変楽になる



写真-9 打ち込み器

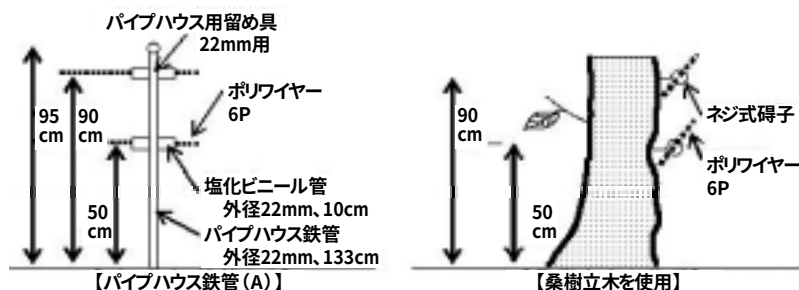


図-1 電気牧柵の概要



写真-10 バッテリー式電気放柵器



写真-11 ポリワイヤー

しいです。

・電気牧柵に慣らしします。事前に牛舎周りのパドックに張っておくなどして触れる機会を与えます。

② 放牧のしかた

・育成牛 (初産牛) は、14ヵ月齢まで舎飼いしながら運動場で放牧馴致を行い、この間に受胎させます。放牧経験牛と一緒に放牧すれば問題ありません。1頭での放牧は避けます。

・経産牛も放牧経験牛と一緒に放牧します。

③ 牛の捕まえ方

・牛にほお綱 (ほお掛) を付けておきます。木の下などにエサを持って行き、牛が集まるようにします。捕まえる当日、電気牧柵



写真-12 単管パイプによる追い込み柵



写真-13 セルフロックスタンション

のダミー線を張り、この中に牛を入れます。太い針金で作った引っ掛け棒ではお綱を引っ掛けて捕まえます。または手でほお綱をつかみます。

- ・簡易追い込み柵をつくり、追い込みます(写真-12)。
- ・移動式セルフロックスタンションを使い、給餌時には常に捕まえられるようにします(写真-13)。

④ 牛の運搬

遠・トラックに載せて連れて行きます。

↑
・軽トラックにつないで放牧場まで連れていきます。
↓

近・綱を付けて歩いて引いていきます。

⑤ 牛の行動

- ・桑の葉、ササの葉、生育初期のギシギシ、フキ等を食べます。
- ・放牧後数日は鳴いたりしますが、慣れてくれば鳴かなくなります。
- ・補助飼料は様子をみて適量与えてください。

(4) 除草剤散布・簡易耕起等

牧草は、マクロシードペレットと地表面の

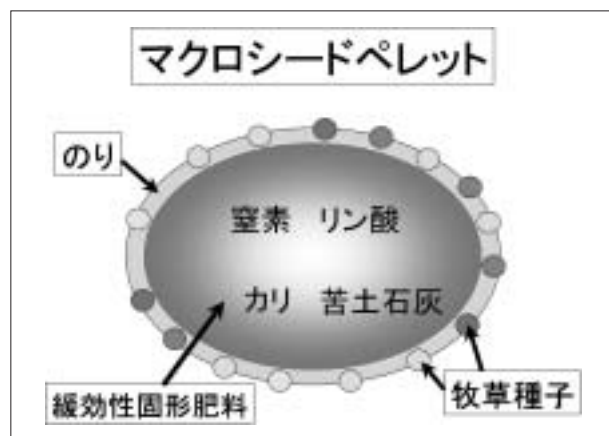


図-2 マクロシードペレットの構造

間の種が定着していきます。そこで、地表面が露出していることが大切です。次の3つのうちから、労力、経費、面積等を考慮して選択します。

除草剤

- ・雑草を抑えるにはグリホサート系除草剤(商品名：ラウンドアップ等)が有効です。

簡易耕起

- ・管理機で株間を耕します。レーキがけ、刈り払いなどでも良いです。

管理放牧

- ・管理放牧を延長し、蹄耕法のみで地表面を露出させます。



写真-14 管理放牧中



写真-18 手散布の様子



写真-15 除草剤散布 [動力噴霧器]



写真-16 のりが乾く前に播種



写真-17 マクロシードペレットと地面の間の種子が発芽する

(5) 牧草播種

マクロシードペレットを使って播種します。マクロシードペレットは、緩効性の牧草用固形肥料（桃の種の形、重さ12g）に、澱粉のりを使って牧草の種子をコーティングしたものです（図-2）。通常の草地造成や更新ができないような斜面、林地に散布します。

①マクロシードペレットの製造方法

固形肥料1袋 20kg

馬鈴薯澱粉のり 100g+水500ml

（防腐剤の入っていないものを使用）

餅米粉末 50g+水150ml

（機械散布時のみ添加、加熱する）

②牧草種子

- ・ペレニアルライグラス1.5kg/10a トールフェスク0.5kg/10a、オーチャードグラス1.0kg/10a、シロクロバ0.2kg/10a

- ・マクロシードペレットの製造、桑園までの運搬、播種は、一連の流れ作業になります。人数は多い方が作業は効率的です。

③播種



写真-19 牧草種子の機械散布の様子



写真-20 草の伸びと牛の行動に注意して転牧する

- ・手散布と機械散布があります。

手散布：小面積で確実に播種をする場合は、重労働になりますが、手散布を勧めます。バケツまたはスコップで運び、足元に落とすようにしていきます。1㎡当たり20個が目安です（写真-18）。

機械散布：大面積または急傾斜地で、手散布ができない桑園で使います。エゼクタ式散布機（クローラ付き：掃除機を逆にしたようなもの）にコンプレッサーで風を送り、マクロシードペレットを吹き飛ばします（写真-19）。

(6) 放牧開始（写真-20）

いよいよ本格的な放牧利用の開始です。

①放牧期間

- ・4月～11月とします。妊娠確認した牛を放牧場に連れて行き、放牧場で分娩、その後種付けを行っても問題ありません。

②牧区

- ・20aぐらいつつ電牧で区切り輪換放牧できるようにします。

③頭数

- ・小牧区10a当たり3頭の割合で入れます。多めに入れることで雑草を抑える効果が期待できます。

④転牧

- ・春先は草の生長が著しいので2日に1回移動させます。夏場は1週間強が目安です。草の伸びと牛の行動に注意して下さい。

草地管理

(1) 施肥

土壌のpH目標値は6.5です。春先の苦土石灰・ようりん散布が大切です。放牧地は牛のふん尿が還元されるので、カリの施肥は少なめにします。グラステタニーの予防にマグネシウムの施肥も考慮します。

マクロシードペレットは緩効性肥料なので、利用1年目は軽めの追肥でかまいません。

- ・苦土石灰・ようりん（2：1）→120kg/10a 【時期：3月】
- ・化成肥料（15－15－5）→100kg/10a 【年3回に分けて】

(2) 電牧の漏電防止

伸びた草や、木の枝が接触することで漏電してしまいます。ポリワイヤーの下草を定期的に刈りましょう。

(3) 雑草対策

ある程度は牛の採食、踏み倒しで抑制できますが、強害雑草は刈り払い、除草剤（ラウンドアップ等）のスポット散布が必要です。

経済効果

(1) 遊休桑園の放牧地化にかかった労働時間と費用（造成面積51.6a、表土の露出に除草剤を用いた区）

作業は大勢で一気に進めたほうが体力的にも精神的にもぐっと楽になります（表-2）。

労働費も含めて、10a当たり11万円ぐら

いです。業者に依頼して、抜根造成、通常牧柵を使用すると18万円ぐらいになる（試算）ことに比べれば、低コストです（表-3）。

(2) 1頭当たりの年間飼養コストと労働時間

表-2 放牧地化にかかった労働時間

区分	延べ作業時間	延べ作業時間 （※10a当たり）	全体に占める割合
桑木除去	74	14.3	60
牧柵設置	9	1.7	7.3
捕獲・給水施設	8.8	1.7	7.1
表土処理	3.9	0.8	3.2
牧草播種	27.7	0.2	22.4
計	123.4	24	100

表-3 放牧地化にかかった費用

単価、金額の単位：円

区分			施設数量	構成部品 品名	購入単価	使用量	金額(税別)	10a当たり	
電気牧柵	牧柵柱	木柱	18カ所	杉大引	150/本	18本	2,700	12,706	
		パイプハウス鉄管	29カ所	直管パイプ	160/本	29本	4,640		
		グラスボール	27カ所	グラスボール	430/本	27本	11,610		
			Gクリップ	45/個	54個	2,430			
	ゲートハンドル		3カ所	ゲートハンドル	540/個	3個	1,620		
	針金	155m・2段	針金	14/m	310m	4,340			
	ワイヤー	140m・2段	スーパーポリワイヤー	22.5/m	280m	6,300			
	電牧器	1個	電牧器ボックス・バッテリー	28,800/1セット	1セット	28,800			
計							62,440		
放牧施設	追い込み柵		1カ所	足場パイプ	147/本	14本	20,580	20,296	
				直交クランプ	212/個	14個	2,968		
	移動式スタンション			76,190/1セット	1セット	76,190			
	計					99,738			
給水施設	給水槽		1カ所	ポリ容器	10,500/個	1個	10,500	7,081	
				フロート式止水弁	2,400/個	1個	2,400		
	水源取水槽		1カ所	ポリ容器	21,900/個	1個	21,900		
	計					34,800			
マクロシード ベレッド	固形肥料		51.6a	773タイプ	2,440/袋	64.5袋	157,380	36,285	
	牧草種子	ペレニアルライグラス	51.6a	フレンド	1,020/kg	7.74kg	7,895		
		オーチャードグラス	51.6a	アキミドリⅡ	1,100/kg	5.16kg	5,676		
		トールフェスク	51.6a	ホクリョウ	675/kg	2.58kg	1,742		
		ホワイトクローバ	51.6a	フィア	715/kg	1.03kg	736		
		クローバ根粒菌資材	51.6a	マメゾウ菌	715/袋	0.52袋	372		
	洗濯のり	51.6a	馬鈴薯粉末糊	105/袋	43袋	4,515			
	計					178,316			
生産諸材料費	除草剤	51.6a	ラウンドアップハイロード	6,080/本	2本	12,160	2,474		
燃料費	チェーンソー、発電機、運搬機、動噴燃料					1,720	350		
小計							389,174	79,192	
機械固定費	使用機械分の減価償却費、修繕費					40,697	7,887		
労働費	臨時雇労賃、家族労働費			時間	123.4時間	136,075	26,371		
合計							565,946	113,451	

表－4 1頭当たりの年間飼養コストと労働時間

	飼養コスト(円)	労働時間(時間)
周年舎飼	111,536	100.9
舎飼い＋放牧*	59,934	43.1
低減率(%)	46.3	57.3

備考 1) 舎飼い＋放牧は舎飼い125日間、放牧240日間を想定

2) 飼養コストには草地維持費も含む

放牧で牛を飼うと、牛を年間通して牛舎で飼うのに比べ、エサ代、労働時間は半分にになります。たい肥舎の使用も少なくて済みます(表－4)。

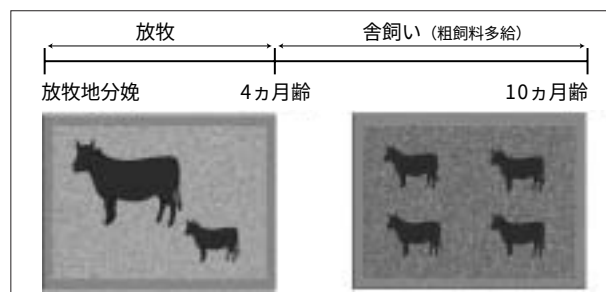
放牧子牛の発育

遊休桑園などを使った黒毛和種の放牧利用は、労働力・コストが大幅に低減されること、雌牛の繁殖性向上が期待できること、粗飼料を十分に摂取したモト牛生産が可能となることなどさまざまなメリットがあります。しかし一方で、放牧場で生まれ育成された子牛は舎飼い産子に比べ発育が劣り、市場評価が低いという現状があります。

そこで、分娩～4ヵ月齢まで放牧育成された放牧場産子に舎飼い産子並みの増体を確保するための粗飼料の給与技術を開発しました。市場でのおおよその標準である300日齢時体重は去勢300kg、雌270kgが発育目標となります。

(1) 飼養体系

放牧地で分娩させ、そのまま4ヵ月齢時に離乳するまで親子放牧を行います。離乳と



図－3 飼養体系図



写真－21 細断混合粗飼料

同時に舎飼い育成を開始して、10ヵ月齢まで粗飼料多給条件で育成します(図－3)。

①粗飼料：

- ・自家産乾草、市販ルーサン乾草、稲ワラを約5cmに細断します。これを、自家産乾草：ルーサン：稲ワラ＝5：3：1（重量比）で混合します。この細断混合粗飼料はTDN58%程度であり、不断給餌とします。

②濃厚飼料

- ・TDN67～70%の育成飼料を体重の1.8%程度与えます(写真－21)。

(2) 本技術の効果

①飼料摂取量

- ・4～10ヵ月齢の飼料摂取量を比較すると、放牧場産子は濃厚飼料と粗飼料を現物量

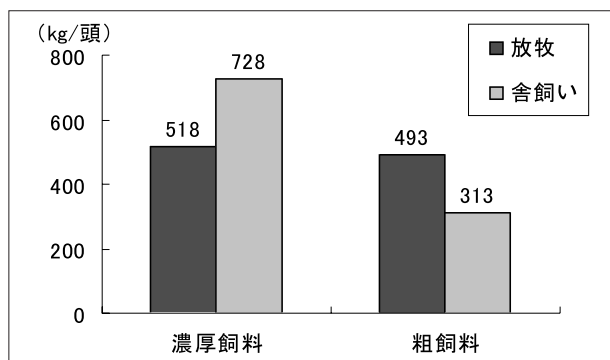


図-4 飼料摂取量の比較

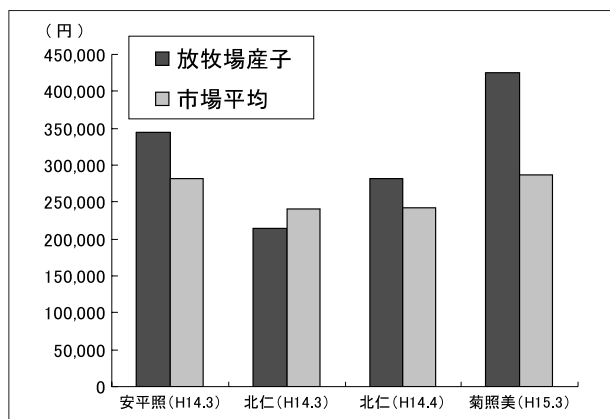


図-6 セリ市場販売価格の比較

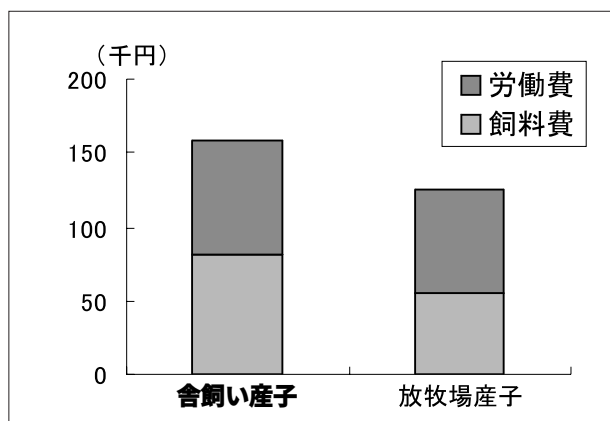


図-7 飼養管理コストの比較



写真-22 放牧場産子 陽春（去勢）300日齢 355kg

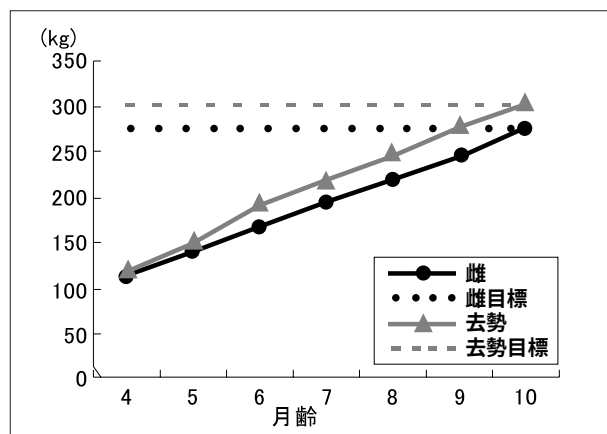


図-5 雌と去勢の发育推移

1：1で摂取したのに対し、舎飼い産子は2：1程度と濃厚飼料摂取量が高い結果となります。これは放牧場産子が、4ヵ月齢以前から放牧地の草を摂取しているため粗飼料の食いつきが早いこと、混合粗飼料にはルーサンが入っているため嗜好性が高いこと等によります（図-4）。

②体重の推移

・本技術で子牛を育成した場合、300日齢時の目標体重である、去勢300kg、雌270kgをともに達成することが可能となります（図-5）。

③300日齢時の各发育値の比較

・放牧場産子は雌雄とも、ほとんどの形質で舎飼い産子の发育を上回ります。つまり放牧場産子でも細断混合粗飼料の給与等適切な管理を行うことで、舎飼い産子と同等の发育をさせることが可能となります（表-5）。

④放牧場産子のセリ販売価格

・子牛セリ市場への出荷成績では、出荷同日の同市場における同じ父を持つ牛と比較して、市場平均を19%上回る価格で取引され

性別	育成法	日齢DG (kg/day)	体高 (cm)	胸囲 (cm)	胸深 (cm)
去勢	放牧	1.01	119.8	155.6	56.2
	舎飼い	0.91	113.9	150.8	56.6
雌	放牧	0.88	115.3	156.0	55.1
	舎飼い	0.87	112.1	151.5	55.2

表－5 300日齢時の各発育値の比較

ました（図－6、表－6、写真－22）。

⑤ 0～10ヵ月齢までの飼養管理コスト

- ・飼料費、労働費を合計した飼養管理コストでは、0～4、4～10ヵ月齢のいずれの期間でも放牧場産子が安くなり、トータルで約20%のコスト低減となります（表－7、図－7）。

(3) その他のメリット

① 細断混合粗飼料のメリット

- ・細断しない場合、牛床への引き込みロスにより、トータルで1頭当たり約90kgの乾草が無駄となってしまいます（図－8）。

② 肥育出荷成績

- ・この調査で供試した放牧場産子で枝肉成績が判明しており、枝肉重量542kg、BMS No.10という結果が得られています。（写真－23）

放牧したモト牛の産肉成績

放牧育成したモト牛の肥育特性はあまり明らかではないため、肥育農家の不安材料の1つとなっています。そこで放牧場産子の市場評価向上のため

(円)

血統・性(セリ日)	試験牛	同血統の市場平均	市場平均に対する割合
安平照・去勢(H14.3)	344,000	281,571	122%
北仁・雌(H14.3)	215,000	240,333	89%
北仁・雌(H14.4)	282,000	241,833	117%
菊照美・雌(H15.3)	426,000	287,000	148%
平均			119%

表－6 放牧場産子のセリ販売価格

(kg、時間、円)

試験区	生育ステージ	区分	内容	給与量・ 労働時間	金額
放牧場育成 産子 (放牧管理)	出生～ 離乳期	飼料費	粗飼料	0	0
			濃厚飼料	413.7	16,986
		投下労働費	飼養管理	25.3	31,667
	合計				48,653
	離乳期～ 出荷期	飼料費	粗飼料	312.5	15,625
			濃厚飼料	727.5	30,555
		投下労働費	飼養管理	25.7	32,063
合計				78,243	
0～10ヵ月齢合計				126,896	
舎飼い育成 産子 (舎飼い管理)	出生～ 離乳期	飼料費	粗飼料	660	16,848
			濃厚飼料	420	14,490
		投下労働費	飼養管理	36.4	45,536
	合計				76,874
	離乳期～ 出荷期	飼料費	粗飼料	312.5	15,625
			濃厚飼料	727.5	30,555
		投下労働費	飼養管理	25.7	32,063
合計				78,243	
0～10ヵ月齢合計				155,117	

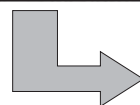
表－7 0～10ヵ月齢までの飼料管理コスト



写真－23 放牧場産子をモト牛に飼育した去勢牛

細断混合粗飼料は、

- ・ルーサン乾草の混合で嗜好性が高い
- ・細断することで、摂取量が高まる
- ・選択採食がなくなる
- ・引き込みによるロスがない



良質粗飼料多給による発育改善と同時に、反芻胃の発達した、良い肥育モト牛になる！

図－8 細断混合粗飼料のメリット

		枝肉重量	ロース芯面積	バラの厚さ	BMS No.	格付け	
		kg	cm ²	cm			
舎飼い産子 (n=10)	平均	438.5	55.6	7.7	5.4	A5:1	A4:4
	標準偏差	40.1	5.4	0.5	1.2	A3:2	A2:3
放牧場産子 (n=10)	平均	453.4	55.4	8.2	5.1	A5:1	A4:3
	標準偏差	31.9	7.2	0.8	2.4	A3:4	A2:2
全国値 注)	平均	436.0	51.5	7.4	5.3	—	
	標準偏差	52.0	7.5	0.9	2.1		
福島県値 注)	平均	454.0	53.0	7.8	5.9	—	
	標準偏差	51.0	7.6	0.9	2.1		

注) 舎飼い産子、放牧場産子の各区は福島県有種雄牛で同様の血統構成とした
全国・福島県値「平成12年度黒毛和種肉質向上緊急対策事業」((社)家畜改良事業団)
舎飼・放牧場産子の平均出荷月例は27～28ヵ月齢、全国値は30ヵ月齢、福島県値は31ヵ月齢

表－8 放牧場産子と舎飼い産子の産肉成績

(円/頭, 税込み)				
区	導入価格	飼料費	販売価格	差益
放牧場産子	327,293	175,132	736,280	233,854
	±25,032	—	±134,134	—
舎飼い産子	348,075	166,020	754,148	240,053
	±7,767	—	±348,451	—

※導入価格、飼料費以外の直接経費は両区で共通

表－9 放牧場産子と舎飼い産子の生産・販売価格の比較

めには、その後の肥育成績が舎飼い育成された肥育モト牛と同等であることが求められます。この点について、放牧場産子と舎飼い産子を同一条件で肥育して、その産肉成績について比較・検討しました。

(2) 検証結果

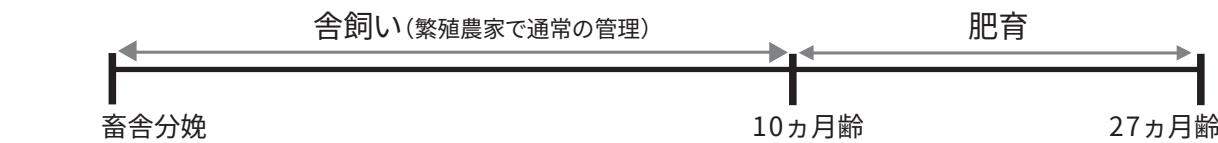
①放牧場産子は肥育期間中の飼料摂取量が濃厚飼料で5%、粗飼料で19%上回りました。また、放牧場産子は肥育過程の前半において粗飼料の摂取量が多い傾向が

(1) 検証方法

肥育牛：放牧場産子、舎飼い産子をそれぞれ10頭（血統をそろえて同数ずつ）。放牧場で分娩後、4ヵ月齢まで親子放牧された「放牧場産子」と、一般繁殖農家で育成された「舎飼い産子」を同一条件で肥育しました。肥育期間は生後10ヵ月齢～27ヵ月齢としました（図－10、11）。



図－10 放牧場産子の生産体系



図－11 舎飼い産子の生産体系

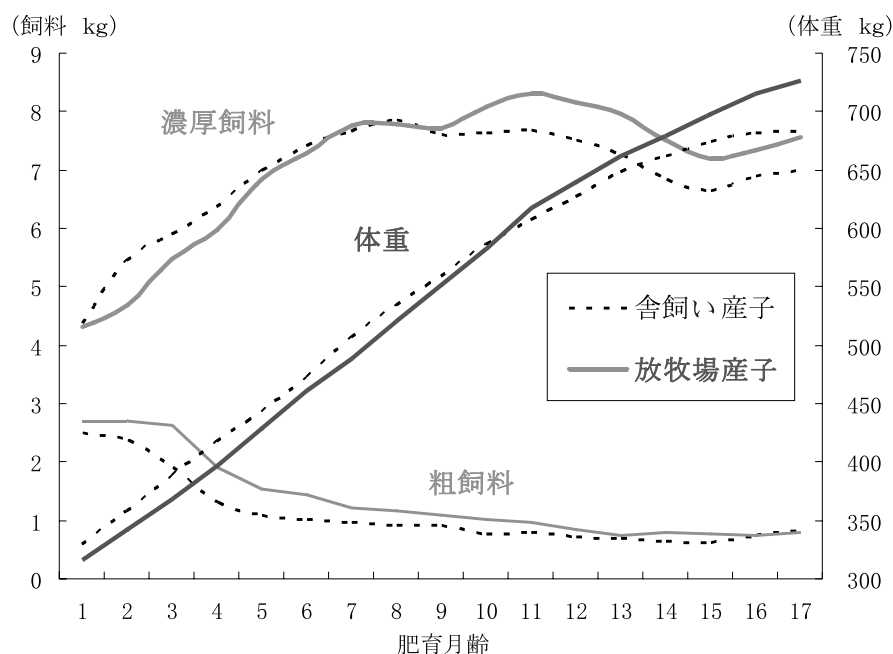


図-12 放牧場産子と舎飼い産子の増体重の変化

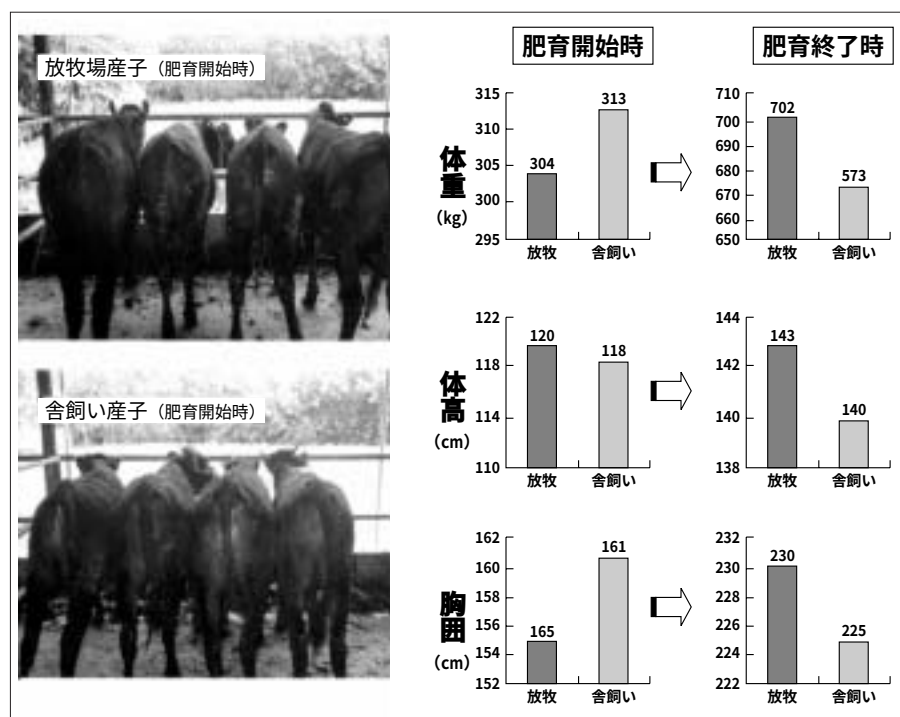


写真-23 放牧場産子と舎飼い産子の肥育の変化

みられました。

- ②体重は放牧場産子は20ヵ月齢までには舎飼い産子に追いつき、出荷時まで高い増体を示しました（終了時平均体重：放牧

場産子732kg、舎飼い産子697kg）（図-12、写真-23）。

③枝肉成績は放牧場産子が枝肉重量で15kg上回りました。全国および福島県の平均値と比較しても、肉質・肉量とも同等の成績が得られました（表-8）。

以上のことから、放牧育成された肥育モト牛は、肥育後半まで飼料摂取量が持続し、高い発育が得られます。また枝肉成績についても、子牛セリ市場で流通している一般の舎飼い産子と同等の肉質・肉量が得られるということが分かりました。

④経営面での比較では、舎飼い産子が枝肉販売価格で2万円程度高くなりました

が、個体によるバラツキが大きいという結果でした。導入価格・飼料費を差し引いた差益は±2.5%（6000円程度）の差で同等となりました（表-9）。

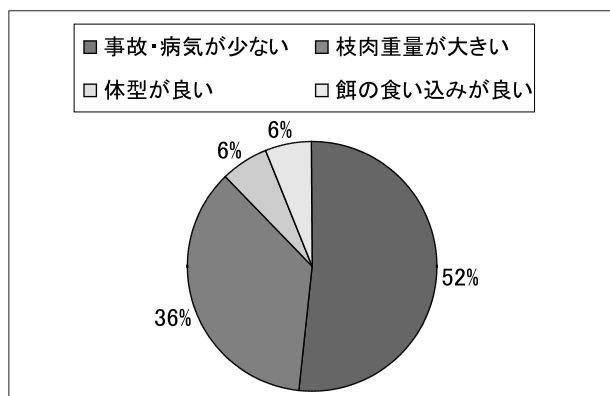


図-13 実証農家の所感 [放牧場産子のメリットと感
じるもの]

⑤この検証に協力してもらった農家の方は、事故・病気が少ないことを放牧場産子最大のメリットと感じていました。それに続き、枝肉重量が大きくなることを高く評価しており、今後も積極的に放牧場産子を導入したい意向でした（図-13）。

おわりに

これらは、平成11年～15年実施した「東北地域基幹農業技術体系化促進研究・市場評価向上を目指した黒毛和種肥育素牛の集約放牧育成技術の確立」において、福島県畜産試験場沼尻支場で担当した部分をもとに執筆しました。

なお、詳しいマニュアル等は福島県畜産試験場のホームページに掲載しています。

(URL <http://www.pref.fukushima.jp/chikusan-shiken/index.htm>)

(筆者：福島県畜産試験場沼尻支場・研究員)

●中央畜産会・出版物のご案内●

家畜排せつ物処理の実際

現場で役立つ情報満載の実用書

たい肥化施設導入のポイントから施設設計、流通、処理・利活用まで、研究者たちの解説、助言等をあわせて、全国で実際に稼働している牛、豚、鶏の家畜排せつ物処理施設38事例を取り上げ、それぞれの効果や課題も詳しくまとめています。

家畜排せつ物処理施設整備に必携の書です。

B5判、140ページ、定価1,050円（税込）送料310円
購入ご希望の方は書名、住所、電話番号、所属、お名前を明記の上
FAXまたはe-mailで下記までお申し込みください。

お申し込みはもよりの畜産会または下記へ――

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-26-5 虎ノ門17森ビル
(社)中央畜産会 事業第一統括部(情報業務)
TEL03(3581)6685 FAX03(5511)8205
e-mail book@cali.lin.go.jp



新潟県中越地震に伴う山古志村の畜産を救う義援金のお願い

社団法人 新潟県畜産協会

社団法人 全国肉用牛振興基金協会

社団法人 中央畜産会

◆全国の畜産関係者の皆さん

本格的な冬を迎えた新潟県中越地震の被災地では、悲しみ、苦しみを乗り越え、全国からさしのべられる温かい支援に支えられて、復興に向けた懸命な努力が続いております。

被災地のなかでも「牛の角突き」「錦鯉」などでその名を知られる「山古志村」には、畜産経営10戸（肉用牛9戸・乳用牛1戸）・約1,300頭、闘牛18戸・約70頭の牛が飼養されていました。道路等のライフラインの復旧の目途がたたないこの村は、他の市町村に避難したまま冬を越すことになりました。

しかし、生産者にとっては生き物を放置することができず、牛を村外に救出するため2億円ほどの経費をかけざるをえませんでした。

現在、同村の畜産農家は、移転先でそれぞれが経営再建をめざし、決意をあらたに再起を期して奮闘しておられます。



◆全国の畜産関係者の皆さん

山古志村の畜産農家が多額の自己負担をしながらもとらざるをえなかったこの選択は、生き物を扱うことを生業とする私たち畜産関係者にとって、決して他人事ではないと思います。

すでに新潟県で被災された畜産農家の方々には、各方面から義援金の働きかけがされています。しかし、山古志村の場合、経営再建を目指しながらも救出費用などの経費が経営再建に重くのしかかっております。懸命に頑張っておられる山古志村の畜産経営者の皆様の再建の一助としていただくため、改めて義援金をここに呼びかけますので、是非、ご協力くださいますようお願い申し上げます。



□ 座 名：新潟県中越地震山古志村の畜産を救う義援金

金融機関名：新潟県信用農業協同組合連合会・本店

□ 座 番 号：（普通）0002654

□ 座 名 義 人：（社）新潟県畜産協会 会長 やなぎさわ 柳澤 たけじ 武治

今まで（社）新潟県畜産協会が開設していました新潟県中越地震畜産関係義援金口座は、12月27日をもって終了しました。全国からの温かいご支援に感謝申し上げます。

おらが故郷の 経営自慢

目標を持って二人三脚、 安定経営を築く

—— 佐賀県杵島郡 田崎さん夫妻の肉用牛繁殖経営 ——

中島 一憲

はじめに

田崎さんが肉用牛繁殖を営む杵島郡北方町は佐賀県の西部、佐賀市より西へ車で約30分の距離に位置しています。近くには焼き物で有名な伊万里市や有田町があり、町内には佐賀から長崎・佐世保へ通じる国道34号が走り交通の要所となっています。

また、主な農産物は、米・麦のほか、施設園芸・畜産・果樹などが生産されています。昔はミカン畑だったところが、今では杉林や竹林になっており、夜遅く帰るとイノシシやタヌキに出会うこともある自然豊かな静かな農村地帯です。

果樹の複合経営から 畜産部門を取り入れた経緯

牛飼いを始める前は、ミカン、キウイフルーツ、シイタケ、野沢菜など果樹を中心に生産していました。シイタケを栽培していた時は、20歳代後半でしたが、昼間はミカンとキウイフルーツの管理や収穫作業、夕方からは



写真-1 田崎さん夫妻

シイタケの管理と明かりを照らしながらの収穫、さらに、夜はパック詰めをして、出荷は午前2時ごろから始め8ヵ所の市場を回り終えて帰るという生活でした。家に戻るころには、夜が白々と明け、「ああ、今日も眠れない…」と悲しくなりながら帰った日が、しばしばあったようです。そして、朝8時から家族でミカンの収穫に取りかかるような、そんな忙しい毎日を過ごしていたそうです。

こうした生活を続けながら、作業の種類が多く、早朝から夜遅くまで仕事をするにもかかわらず、農業所得の増加が見込めず、不安感を覚えたといいます。

そのころ長男が大学への進学を決意し、家

の仕事を手伝いながら受験勉強に励み、受験したものの、不合格の結果に終わりました。家族での話し合いの結果、翌年に長男は上京し、新聞配達などのアルバイトをしながら予備校に通い、見事に合格を果たしました。しかし、親の立場として、仕送りでもして長男にゆっくりとした受験勉強の環境を作ってあげられなかったことは、今でも心苦しく、長男には申し訳なかったと田崎さんはいいます。

残った田崎さん夫婦と両親でハウスマカンと畜産の複合経営を始めましたが、母親が突然の脳梗塞で倒れ、手術をしたものの、後遺症が残り看病と農作業の日々が始まりました。ハウスマカン・畜産の飼養管理が不十分で、経営成績が落ち、田崎さん自体の疲れもピークに達し、経営の先行きに不安感がより一層募ったとのことでした。

そのような状況から、現在の農地と労働力では作業効率を高めるとともに、安定した高所得を期待できるかについて、家族や農協等の関係者に相談しました。その結果、「地域内では畜産が盛んで、当時は畜産物価格が高値で推移していたこともあって、高収入が望める」と判断し、平成元年に肉用牛繁殖を経営に取り入れ、ハウスマカンとの複合経営を開始した——というのが畜産を取り入れた経緯です。

奥さんのヒロ子さんは、最初は、牛を触るのも怖かったそうですが、地域の仲間や農協の技術員さんからの励ましでなんとか飼養管理に慣れ、そのうち子牛に対する愛情が芽生え、ミルクを与えたり、体を擦ったりしてうちに牛飼いが楽しくなっていったそうです。

現在は成雌牛⁶⁵頭を飼養し、年間の子牛販売頭数は60頭、子牛の販売は地元のセリ市場へ出荷しています。田崎さんの子牛を購入した肥育牛農家も「発育が良い」、「人に慣れて管理しやすい」などの高評価を受けており、わざわざ出荷日を合わせて田崎さんの子牛を購入しに来るほどになりました。

経営改善への取り組み

畜産を始めてしばらくして、ヒロ子さんは、農協が主催する和牛婦人部会へ加入し、積極的に生産技術の修得、情報の収集に努め始めました。部会のメンバーは、近所の婦人ばかりで、先進地への視察、講習会などに参加するようになり、さらには畜産経営の知識と技術の向上を図るため、平成3年に経営記帳グループ「牛の子クラブ」を婦人部で設立し、農協や(社)佐賀県畜産協会(当時、佐賀県畜産会)の支援のもと飼養管理技術や財務管理に関する経理簿記やコスト低減等について取り組みました。

最初は各種伝票を整理し、記録帳簿への転記作業で言葉も交わすこともなく過ごしていましたが、そのうち雰囲気慣れ、子どもやご主人の話題、時には愚痴のこぼし合いでストレス発散の場にもなったようです。

一方、生産技術においては畜産経営開始以来、徐々に増頭するなかで平成6年3月に信輔さんが人工授精師の資格を取得し、その後、種付けを行うようになりましたが、受精率が伴わず精神的に落ち込んだ時期もあったよう



写真-2 成雌牛牛舎の運動スタンション



写真-3 牛舎から裏山のミカン畑の運動場へと続いている

です。しかし、持ち前の「頑張り精神」で、知人に聞いたりデータをとったりして自分で研究した結果、受精率も上がり、授精に対しての自信が持てるようになったそうです。

さらには、子牛の早期離乳技術の導入により「1年1産」（分娩間隔11.7ヵ月）という県下でもトップクラスの繁殖技術の実現ができ、以前よりも観察、運動等日常の飼養管理の改善ができるようになりました。

そのようなことで、経営に対する意識改革を行い、信輔さんが運動場への移動、成雌牛の手入れ、観察・授精を行い、ヒロ子さんが子牛の哺乳、育成牛の手入れ、記録・記帳を行い、毎日の夫婦間の役割分担を確立し、夫婦、二人三脚での牛の飼養管理、個体能力の向上、コスト低減等を図っていきました。

前述したように畜産を経営に取り入れてから以降、和牛婦人部会の一員として部会員同士の研究会、さらに先進地へ視察研修などに積極的に参加し、常に経営改善を念頭において取り組みました。具体的には、①適度の運動と発情発見の場として役立てるため、ミカン畑のミカンの

木を伐採し牛の運動場を建設した、②成雌牛の牛舎は運動スタンション方式を取り入れ、牛舎と運動場の行き交いを自由にさせることで、牛のストレスを軽減させる――など施設にも工夫をこらし成績の向上に結びつきました。

粗飼料の低コスト化

田崎さんの経営では粗飼料のコスト低減を目指して、スーダングラスとイタリアンライグラスを延べ200a作付けし、総収量として約90tを乾草とサイレージに調製して、給与しています。

粗飼料としてはこのほかに畦畔の草と稲ワラを給与していますが、今後、さらに自給粗飼料の栽培面積の確保に努めることにしています。

環境保全対策

畜舎からたい肥舎へ搬入した排せつ物は、月3～4回位の切り返しを行い、約4～5ヵ月間か

けてたい肥化处理し、畑地等へ土壌改良剤として利用しています。その他、稲ワラとの交換、さらに耕種農家等には無償で譲渡しています。

しかし、現在のたい肥舎面積は頭数に対してやや不足しているため規模拡大する場合は、たい肥舎の設置を考えているようです。

地域農業や地域社会との 協調・融和について

平成13年には記帳会を通じて新たに和牛部会を結成しました。その設立に当たっては、田崎さんが組織の中心となって重要な役割を果たしてきました。部会メンバーの旅行や冠婚葬祭などの際に互いにサポートしあい、畜産経営における「ゆとり」の創出に貢献してきました。また、精神的にも喜びとゆとりをもって活発な交流を図り、管内の畜産と農業の活性化に努めています。

将来の目指す方向性と課題

近い将来、成雌牛70頭規模とし、年間子牛出荷率100%を目標としています。そのために今後も分娩間隔は12ヵ月以内を維持する努力をすることでしょう。

また、今後、借地による圃場面積を確保し、自給粗飼料の増産と通年サイレージの給与体系を図り、育成牛と成雌牛を運動場へ開放し適度の運動と牛の観察をすることで、さらなる繁殖成



写真-4 早期離乳した子牛

績の向上を図ることとしています。

一方、地域での畜産互助活動等への積極的な参加と、「個別経営の安定継続のため自給粗飼料増産やたい肥などの有効利用など資源循環型の畜産を目指していきたい」と田崎さんは言っています。

今後も、さらに分娩間隔の短縮はもちろん子牛の哺育技術などの向上にも努め、佐賀の特産である「佐賀牛」を支える肥育モト牛づくりに励んでほしいと思います。

おわりに

これまで築き上げた田崎さんの農業経営にかかわってきたさまざまな人たちに感謝の気持ちを忘れずに、常に初心の精神で、将来を担う後継者に継承するべく、良き指導者としても夫婦二人三脚で頑張ってほしいと期待しています。

(報告者：佐賀県畜産協会・
畜産コンサルタント)

おらが故郷の
経営自慢